



《ご寄稿の先生》

農大春秋……………⑩

四年ぶりのピョンヤン訪問

猪俣 道也

4月末からのゴールデンウィークを利用して4年ぶりに北朝鮮の地質学者と交流をしてきた。2002年と比較し変化した点をメモしておきたい。

前回の訪朝は2002年5月で、滞在中「近いうちに簡単に行き来できるようになる」と関係者に言われた。後で考えると、その時の言葉はどうも小泉純一郎日本国総理大臣と金正日朝鮮民主主義人民共和国国防委員長が、2002年9月17日、平壤で出合い会談を行い国交回復される予定であること暗示していたので

はないかと思える。しかし現実は一層厳しく、その会談後、拉致問題等で日朝関係は混沌状態に陥り、小泉総理は平成16年5月22日に再度の訪朝をしたが、現在にいたるまで国交は正常化されていない。

この間、前から共同研究をしている朝鮮の地質学者とデータの交換と討論の機会を持ちたいと思い、先方の国家科学院に訪朝の打診をしてきた。昨年度末にやっと訪朝可能ということになったが、土壇場で4月中旬以降に訪問してくれとの延期の要請があり、5月の訪朝になった。

「入国」

4月29日、中国の瀋陽空港でビザを取得、第一関門を無事通過、高麗航空に搭乗し順安空港へ降り立った。空港では国家科学院2局責任部員の金建秀（キム・コンス）博士らが出迎えてくれた。空港内及び周辺の風景も基本的には4年前と変わったという印象は無かった。また、携帯電話の提出を求められ預けるなどの手続きも前と同じである。しかし、平壤市内へ向かう道路は、以前はデコボコ道で工事中であったが、今回は整備され芽吹き始めのかなり成長した街路樹の中を快適なドライブで平壤ホテルへ向かった。このホテルは前回と同じホテルで、平壤大劇場や大同江に面し、朝の河畔の散策には最適な立地条件の所にあり、在日朝鮮人の方々が良く利用するホテルである。空港からホテルまでで気付



写真1 南北朝鮮選手が一緒に競技（大城山の競技場にて）

いたことは動いている自転車・自動車の数が前に比べ大幅に増えたことである。人々の服装にも変化の兆しを感じられた。

「メーデー」

4月30日（日）は万寿台にホテルから歩いて行き、5月1日はメーデーで式典や運動会（写真1）に参



写真2 電飾された平壤大劇場（メーデーの夜景）

列した。これには韓国の各道からの代表団がバス数台で参加し、南北合同で競技をする光景が見られた。夜の光景も平壤大劇場など電飾されて大変きれいであった（写真2）。5月2日にこの訪問の目的である地質研究所の方と久闊を叙し、情報交換をした。彼等は研究を進展させるた



写真3 地質研究所の人と（左端：司空博士、右端：橘博士）。

め私の訪問を心待ちにしていたようで大変嬉しかった（写真3）。

「農場」

今回の訪朝は、地質学の学术交流だけでなく農業関係の交流もかねていた。それは株式会社アイエムからの有機肥料の試験提供があり、その施肥の現場を見たいという事も兼ね

ていたので、橘 隆一博士（林学）（現在 豊橋技術科学大学博士研究員。株式会社アイエムは、橘 博士が農大で学位取得後2006年1月まで2年在籍していた会社）も同行した。それで万景台農場など何ヶ所かの農場を訪問、既に3月に到着した肥料を確認するとともに施肥などについての各種の討論もしてきた。現場の農場の人たちとの如何に作物の収量を増やすかなどの議論は多岐に渡り、私の専門とは少し異なる分野であるが議論は興味深かった。また、この関係で平壤市内の污水处理研究の施設も見学した。同行された朝鮮大学の地理学の司空 俊博士の博識に助けられ農業や污水处理関係の議論も比較的スムーズに運んだ。

また、橘博士の専門が「林学」という事もあり一部の肥料は林業分野



写真4 愛国林に到着していた肥料

にも送られていて「愛国林」という施設も訪問し、現地で肥料の確認、現場の状況を認識してきた（写真4、5）

「妙香山」

5月3日から1泊2日で高速道路を使い妙香山に行った。平壤からかな



写真5 愛国林の果樹畑で議論

り離れた田舎でも自転車・自動車の数が増えていることと妙香山での中国人観光客の多さにビックリ。この中国人観光団の雰囲気は、1990年代に中国の地質調査の帰りがけに空港で会った日本の農協の団体旅行団と雰囲気似ており、日本を追っ

て中国が加速度的に豊かになっていくことを北朝鮮で実感した。また、この中国人観光客たちの振る舞いが北朝鮮の社会の仕組みを変えつつある様に思えた。平壤の売店・露店が増え、置かれている品物も多くなっていた。1992年の最初の訪朝時、地方旅行をした折に昼食のパンや弁当を確保するのに大変気をもんで、やっと苦勞して入手したこと等を思い出し隔世の感をもった。

妙香山の帰りには最近整備された竜門鍾乳洞へ立ち寄った。大きな鍾乳洞で、全体を見るには長時間必要であるが我々は次の予定もあり、主要部を駆け足で見た。

「農村」

周辺の農村と農作業風景は、春先の芽吹きを迎える風景のためか活気が感じられた。日本では田植え機が普及し、稲作の苗代の風景は見られ

なくなったが、ここでは苗床に種籾を時間をずらして播種した苗代風景があり、昔の日本の農村を思い出した(写真6)。

朝鮮半島北部は山間地が多いが平野部の水の便は案外悪いので、農地としては乾燥した畑地として使用されてきた地域が多い。この平野部に水を供給しようという事業の一つである「价川―台城湖水路」が完成して美男平野に農業用水を供給している(写真7)。この水路は高速道を横切っているので高速道脇の高台に登り、そこから見学した。この水路は河床の侵食を抑える為に極めてゆるい勾配で設計されたそうで、水流はゆったりしていた。

5月4日の午後3時過ぎに平壤に着き、地質研究所の所長等と再度あわただしく短時間の研究協議を終えた。5日は書店巡りをしてめばしい

出版物を見てまわり、午後は国家科学院2局局長の兪礼成博士とまとめの会談をした(写真8)。幸いにも我々の滞在中は天候にめぐまれていたのだが、この日の夕刻から朝まで土砂降りの降雨になった。

「出国と帰国後」

5月6日に平壤の順安空港を離れた。私が交流を開始後14年間に関係者が3人(金錫泰教授・金鐘來教授・金相録局長)も亡くなっている。更に白龍浚教授(73歳 1933年生まれ。「朝鮮の地質」という英文版の書籍の編集者。元金日成総合大学教授)もガンとのことで今回はお会いできず、地質研究所の人たちを通しての伝言を聞く状況で、研究成果のまとめを急がなければならないと痛感した。私は「十年一仕事」を心がけていたのだが、今更ながら私自身の能力不足が研究を遅らせた

ことを、強く反省せざるをえない心境である。

朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）は、直行できるなら2時間あまりで行けるところだが今回は中国の瀋陽でビザを取得したので時間がかった。まだまだ近くて遠い国である。しかし4年前の記録では「5月3日にピョンヤンのホテルで出した

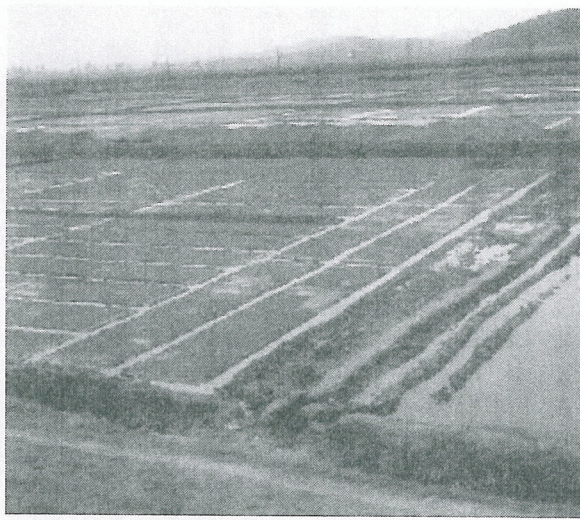


写真6 苗代風景

絵ハガキが帰国後の5月13日に自宅に着いた」とあり10日間で葉書は到着したようだが、今回は5月2日に出した絵ハガキが5月8日に着き、7日間に短縮され、少しは近い国になったようである。

また帰国後日本は雨模様であったがこの雲は5月5日夕刻平壤を土砂降りにした雲で、雲と共に帰国した

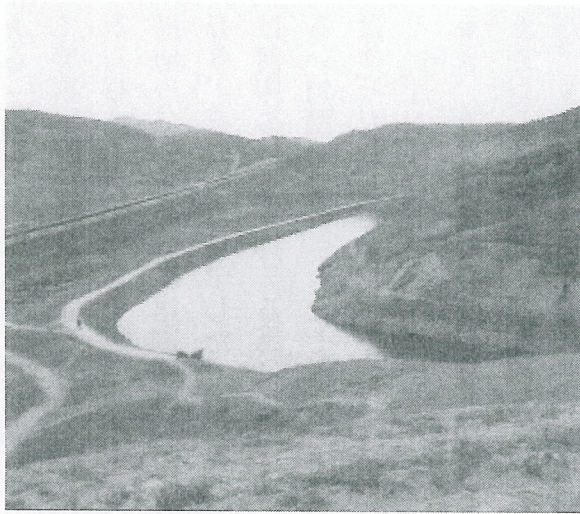


写真7 价川—台城湖水路

思いに襲われ、地理的に近いことを再認識した。

色々問題はあがあるが、北朝鮮が近い国になり科学をはじめ各種の交流が容易に出来るようになることを願うばかりである。

（教職・学術情報課程教授）



写真8 国家科学院2局局長俞礼成 博士と（右から2人目）。

第50巻 発行者 東京農業大学教育後援会
農 大 学 報 122 〒156-8502 東京都世田谷区桜丘1-1-1
第 1 号 電 話 03-5477-2564
平成18年 7 月20日 F A X 03-5477-2638
E-mail: koenkai@nodai.ac.jp

印刷所 株式会社 マイクロ印刷
〒101-0063 東京都千代田区神田淡路町2-4
電 話 03-3251-0371